

主 題：主よ、祈りを教えてください

聖書箇所：マタイの福音書 6章9－13節

私たちは上半期の働きを終え、下半期に向かって行こうとしています。いろいろな教会の働きを考えると、私たちはもっともっと働きのために祈って行くことが必要です。教会ではいろいろな働きがなされています。それらすべての働きのために、私たちが今しなければならぬことは、その働きのために祈って行くことです。私たちクリスチャンにとって祈りが大切であることはよく知っています。というのは、祈りというのは自分を変えるカギだからです。祈りは自分自身を変えて行くことのできる大きな力です。私たちが神の前に立つときに、私たちは自分自身の心を探り始めるからです。詩篇の著者がこのようなことを言っています。「**23神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。**」(詩篇139：23, 24)。

● 祈りは、

(1) 自分を吟味する機会となります。私たちは自分が神の前に立つのにふさわしいのかを考え始めるときに、私たちのうちに変化が生まれて来ます。まず、神の前に罪を告白しようとし、神の前に喜ばれることをして行こうとします。そのようにして成長して行き私たちは変えられて行くのです。神の前に立って自分を吟味して行くことは非常に大切なことです。その意味からも、祈りが私たちにとって大切なものであることが分かります。

(2) また同時に、祈りは働きをなすカギでもあります。祈りはすごい力をもっています。トーレーという牧師のもとに不良の子どもをもつ母親がやって来ました。彼女の質問はこの子をどうしたら良いでしょうか？というものでした。この母親に対してトーレーが答えたことは「あなたはお子さんのために祈られたことがありますか？」でした。もちろん、彼女はありますと答えました。トーレーはこう言います。「あなたはお子さんの悔い改めと品性の向上を目標として祈られたことがありますか？そして、この祈りが必ず答えられると期待して祈りましたか？」と。確かに私たちは祈っていても、ほんとうに主が働いてくださると期待しながらどれだけ祈っているでしょう？神はみわざをなして下さり、神なら人間には不可能なこともなし得るのだという確信をもって祈っているのでしょうか？私たちは一人一人自分の祈りの生活を吟味してみなければなりません。

(3) 祈りは祝福をもたらす大きなカギです。イエスを信じていない者に神は救いを与えてくださいました。また教会に大きな祝福をもたらしてくれます。その祝福をもたらすカギがこの祈りです。あなたがイエスを信じたときのことを考えたとき、まちがもなく多くの方たちがあなたのために祈っておられたはずで、だれかが祈っているのです。あのハドソン・テラーという中国に出て行って多くの中国人に伝道した有名な宣教師は、あるとき、父の書齋から一冊の本を取り出して読み始めました。その同じ頃、彼の母親は家から80キロ離れた所にいました。神は彼女の上に特別の重荷を与えてくださいました。彼女は友だちから離れて一人主の前に何時間もひざまづいて息子の救いのために祈り始めたのです。やがて、祈りが聞かれて答えられたという確信に満たされるようになりました。さて、自宅にいたハドソン・テラーは読み始めたその本の中に、「キリストの完成されたみわざ」というその表現に彼の心は捉えられました。そして、その本を読んで行くうちに、ひざまづいて救い主とその救いを受け入れ、いつまでも主を賛美すること以外に何も残っていないと、彼はそこでイエス・キリストを信じ受け入れるのです。母親が帰って来るのを待ち焦がれていたハドソン・テラーのもとに、2週間後、母親は戻って来ました。出迎えた彼に母親はこう言うのです。「お母さんは知っていますよ、あなたが話そうとしていることが何か、もう2週間も前から知っていました。私はこのうれしい知らせを喜んでいました。」と。このような話を聞いてある人は「そんなバカな、そんなことは有り得ない」と思うかもしれませんが、神だからできるのです。ハドソン・テラーの母親はこの祈りの大切さ、力というものを知っているのです。そして、神は不思議な方法で、彼女が人々から誉められるためではなく、神がどんなに偉大な方であるかを明らかにするために用いられたのです。こういうことを聞くと私たちは、自分の未信の家族に対して失望してはならないことを教えられます。私たちは期待をもって彼らに福音を語り続けて行くことです。神はいろいろな方法を用いて人々に福音を語り救いへと導いて下さる、私たちがなすべきことはこの福音を語り続けて行くことです。そして、私たちは彼らのために祈り続けて行くことです。

祈りによって教会はこれまで大きな勝利を得てきました。というのは、教会の敵、クリスチャンの敵

はサタンです。サタンは必死になって教会を攻撃します。誤った教理によって混乱や妥協をもたらそうとします。教会の中に分裂や分派を築くことで教会の証を台無しにしようとし、信仰の先輩たちはそのような問題に対してどのように立ち向かったでしょう？彼らは祈りによって勝利したのです。アメリカ・ダラスのある有名な一人の牧師は、教会が大きな危機を迎えたときに、教会員に何を望んだでしょう？それはすばらしいメッセージをすることではなかったし、どこかのカウンセラーに行くこともなかった、彼が教会員に言ったことは「みなさん、今ひざまづいてください」でした。全員がひざまづいて主の前に祈ったときにその問題は解決しました。

祈りは大きな力をもっています。祈りはクリスチャンに与えられた大きな祝福です。しかし現実には、私たちの信仰生活にこの祈りほどおろそかにされているものはないのではないかと思います。祈りは大切だと知っていながら私たちの祈りはどうでしょうか？トレーはこのように言います。「かつてのわたしの祈りは単なる義務であり、時にはそれはうんざりする退屈な義務でしかなかった。しかし、祈りが何か分かったとき以来、祈りとはただの義務などではなく、人生におけるもっとも重要な特権の一つである」と。義務として祈っていた、ただ何となく祈っていた、私たちにもないのでしょうか？祈らなければいけないとか…。今私たちが祈りについて学ぼうとしている理由は、私たちはイエスを信じる前から実は祈ってきているのです。その祈りは自分のほしいものを手に入れる手段です。救われる前も私たちは神と名のつくところに出て行って、そこで一生懸命祈りをささげることによってきっと聞かれると信じていました。そして、クリスチャンになった後も私たちは同じようなことをするのです。熱心にさえ祈れば神は私のほしいものを与えてくれると。朝早く祈りさえすれば神は聞いてくれると。このように自分を苦しめてその苦しみの中で祈り続ければ神は聞いてくれると。聖書はそのようなことを教えていません。私たちはいつの間にか、異教の習慣を持ち込んで、そういうことを実践することによって自分のほしいものが手に入ると思い込んでしまっているのです。そういう祈りをしているクリスチャンたちが残念ながら多いというのは、否めない事実ではないでしょうか？私たちもそのような祈りをささげて来たかもしれません。また、そのような祈りをささげているかもしれません。だから、私たちは今、もう一度しっかり祈りとは何かを学ぶことによって、かつて持っていた祈りのその熱い思いに再び燃やされて行くことです。私たちの教会にとって必要なことは、この祈りの重要さに再び私たちが目覚めて行くことです。初代教会がそうであったように、私たちも主の前に祈ることです。いろいろなプログラムを考えるよりも、完全と思える組織を作ることに時間を費やすよりも、今私たちに必要なことは過去もそうであるし、今も、これからもそうであること、主の前にひざまづくことです。私たちは忙しさのゆえに、余りにもそのことをおろそかにしているのです。時間がないと一番削られて行くのは、祈りの時間であったり、みことばの学びの時間であったりします。だから、私たちのうちには何も起こって来ないのです。祈りによって私たちは変わって行きます。祈りは大きな祝福をもたらします。私たちがそれを失ってしまっている、そういう原因を作っているのだということに気付かなければならないのです。ですから、今日と次回、私たちは「祈り」について学んで行きます。

テキストとして選んだのは、マタイの福音書6章9-13節、「主の祈り」と言われているところです。『9だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。』  
:10 御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。  
:11 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。  
:12 私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。  
:13 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。〕』

この並行箇所はルカの福音書11:2-4です。

11:1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

:2そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。』

:3 私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。

:4 私たちの罪をお赦しください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちを試みに会わせないでください。』

マタイ6:9-13をテキストとして学んで行きますが、1節ずつみことばを細かく学ぶことは、すでに「山上の説教」のメッセージにおいてしたことなので再びしません。今回は「祈りとはどういうものか」、祈りの初歩的なこと、根本的なことについて学んで行きます。

☆祈りとは何か？

### 1. 主をあがめること

先ほどから見ているように、祈りとは口に出さなくても私たちのほしいものを神からいただくための

手段であると思っている人がいるかもしれません。果たしてそれが祈りなのかどうかです。9節に『**天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。**』と教えられています。「主の祈り」と言われているこの箇所には、六つのことが記されているのですが、最初の三つは神の栄光に関することです。後半の三つは私たちの必要に関することです。そして、この模範的な祈りをイエスは弟子たちに教えられたのですが、イエスが最初に言われたことは「**御名があがめられますように。**」です。これがすべての祈りの目的なのです。神があがめられること、それが祈りの目的なのです。そのような祈りを私たちはささげているのでしょうか？そのことを見て行きます。そして、その意味が分かれば私たちは変わってきます。先ほど話したトーレーという牧師はこのように言います。「ほんとうの祈りの意味が分かった。祈りを聞いてくださるのは神であり、私たちは実際にその神の臨在の前に立ち、そのお方に求め、また、そのお方からいただくのであるという事実を理解したことで、私の祈りの生活が変わった」と。祈りが何であるかが分かると私たちの祈りの生活が変わってくると言うのです。そして、祈りの生活が変われば私たち自身が変わります。ゆえに、祈りとは何かをしっかりと見る必要があるのです。

「御名」とはお名前です。お名前があがめられますようにと。神のお名前は旧約聖書の中にも「ヤーウェ」「エホバ」「アドナイ」といろいろ記されていますが、そのような名前が祝されて行くようにということをイエスがここで話されているのではありません。名前はその人格、性格、働きのすべてを指しています。つまり、イエスが話しになりたかったことは、神のすべてがほめたたえられるように、神のすべてがあがめられるようにということです。私たちが主の前に祈るとき、ある時はほんとうに苦しみの中で祈るでしょう。また悲しみの中で、辛さの中で祈ります。そのように私たちが様々な状況の中で祈るとき、私たちはその祈りを通して神をあがめているかどうか、神をほめたたえているかどうか、そのことを考えてみてください。私たちの現実はなかなかそのようにはならないのです。なぜなら、苦しいときや悲しいとき、辛いときというのは、神への感謝よりも私たちの願いが優先するからです。どうすれば、私たちが心から神をほめたたえることを実践して行けるのでしょうか？それは、私はどのようなどころに立っているのかを覚えることです。それを覚えなければ私たちの祈りはいつの間にか自分の願いを話すだけのものになってしまい、「神をほめたたえます」と言っても、まるで挨拶のように心が伴わないのです。私がどのようなどころに立っているのかを覚えるなら、私たちは苦しさの中にあっても、悲しさの中にあっても、辛さの中にあっても、問題の中にあっても、神をあがめて行くことが必要だと分かります。

では、どうすればそれができるのでしょうか？それは私たちがもう一度、私の神がどのようなお方かを覚えることです。同時に、私が今どこに立っているのかということを思い出すことです。だから、イエスは言われたのです。「**天にいます私たちの父よ。**」と。「天」というと何か上の方を指していると思います。天は神の臨在なさっているところ、神の御座があるところ、そのようなことをイエスは言われたのでしょうか？実はイエスは「**天にいます私たちの父よ。**」と言うことによって、神の偉大さ、神の力、神のきよさは一切他のものを寄せ付けない、すべての点においてすぐれたお方であるということを示すために、このような表現が使われたのです。つまり、地上の父親と比較されているのです。地上の父親も大きな責任をもっています。家族に対する責任です。父親は家族の必要を満たして行くという大きな責任があります。物質的に彼らの必要を満たして行くことが必要です。彼らが生きて行くために必要なものを家族に与えて行かなければならないのです。働かなければならない、そして、家族に必要なものを供給しようとしています。でも、物質的な必要だけを満たせばいいのではありません。精神的な必要も満たして行くことが必要です。家族への心のケアが要ります。先日、私の子どもが通う学校で教師が大きな事件を起こしました。新聞にも載りテレビでも放映されました。保護者を集めて会合をもちました。子どもたちの反応はその話題ばかり、ある親は、私の娘は学校から帰って来るとその担任の先生のこと是一言も口にしません、ただ泣いてばかり、どう答えていいのかわからない、どう説明すればいいのかわからない、どのように慰めていいかわからないと言います。全体の会合でもその通りでした。父親の責任はそこにあるのです。父親は一家の長として家族の心のケアをする必要があるのです。彼らを慰め励ますことが必要です。先週、数日間神は私に不思議なことに時間をくださり、子どもたちが納得するまで、ある時は娘と何時間かいっしょに過ごしながら、いろいろな話をしました。どうすればこの問題を神にあって解決することができるのか話すことができました。大丈夫か、分かったかと何度も確認しながら話しました。私の責任だからです。同時に、父親は家族の霊的なケアをして行かなければなりません。家族の者たちの信仰の成長、もちろん一人一人が神とつながることによって成長するのですが、父親は彼らが成長して行くために助けをするのです。このように家族の必要を満たし、家族を守り導く責任があるのです。父親はこのような責任を負っているのですが、私たちがなすことは不完全です。でも、天の父はすべての点で完全であるとイエスは言われているのです。だから、私たちがまず祈るときに覚えなければいけないことは、「このお方は完全なお方である」ということです。私たちが主の前に立つと

きに覚えることは、私の主は完全だということです。しかも、私が立っているところは、イエスが十字架で死なれるまで大祭司が年に一度しか入ることができなかった恵みの御座です。イエスが十字架で死なれたときに、その聖所と至聖所を仕切っていた幕が裂けました。つまり、イエスを信じる者はいつでもどんなときでも、その恵みの御座に立つことができる、そのような特権にあずかったのです。しかし、それまでのユダヤ人たちは恐れをもって主の前に立ちました。私たちもそのことを覚えなければなりません。私たちは完全な神の前に立っていることと、私の立っているところはこれまで人々が恐れをもって立った恵みの御座であることを。そして、私はこの神と顔と顔とを合わせて話をしていることを忘れてはならないのです。それによって、私たちは徐々にそれまで愚痴であったり自分の願いであったりそのような祈りであったのが、まず神を見上げることによって、どこに立っているのかを覚えることによって、神への感謝、賛美という称賛が生まれてくるのです。

ですから、私たちがいつも主をあがめて行くために必要なことは、この方がどんなにすばらしい偉大なお方であるかをしっかり覚えることです。

### ●主をあがめるとはどういうことでしょうか？

先ほど見たようにそれは、この神がすべての点でほめたたえられるようにということです。10節を見ると「**御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。**」と記されています。自分の願いを祈るよりもまず神をたたえて行く、神のすばらしさをほめたたえて行く、そうすれば、徐々に自分のことなどどうでもよくなって行きます。神をたたえることによって心は感謝と喜びにあふれ、すべてを神にゆだねますと、そのような祈りをささげたことは何度もあるでしょう。そのようなときこの10節の祈りは自然に出て来るのです。「**御国が来ますように。**」、「御国」とは神の主権であり支配であり統治です。神は永遠から永遠に王です。みことばが言うように「**主は世々限りなく王である**」（詩篇10：16）と。また、145：10-13には「**主よ。あなたの造られたすべてのものは、あなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめたたえます。：11 彼らはあなたの王国の栄光を告げ、あなたの大能のわざを、語るでしょう。：12 こうして人の子らに、主の大能のわざと、主の王国の輝かしい栄光を、知らせましょう。：13 あなたの王国は、永遠にわたる王国。あなたの統治は、代々限りなく続きます。**」とあり、神はずっと王だった、今もこれからも。イエスは何を言われたのでしょうか？この王の統治が早くこの地上で始まるようにということです。みことばはそのことを約束しています。地上に千年間の王国が築かれると。そして、その千年の王国に入るとき、すべての人々は主をあがめる者たちです。ですから、この祈りが教えることは神をあがめているなら、もっと多くの人たちが神をあがめるようにと願うということです。そして、この地上にあって人々がこぞって一つになって主をあがめる、そのような日が早く来るようにと。イエスがこの地上にあって王としてしっかり治めてくださる、そのときが早く来るようにと、そのことを確かに教えるのです。

しかし、それは地上の王国だけの話ではありません。このみことばは私たちに霊的な王国のことも教えるのです。神の支配に一人でも多くの人々が招き入れられるようにと。つまり、一人でも多くの人々が救われるようにということです。救いというものは、私たちが神の支配を拒んでいた、その私たちが神にすべてを支配していただくことです。このまことの神が自分の神としてすべてをゆだねる生き方をしていなかった私たちが、この神にすべてをゆだねて従って行こうとするのです。ですから、この祈りを見たとき、より多くの人たちがこの神のご支配の中に招き入れられるように、つまり、救いにあずかるようにと言うのです。救われる人が起こされるなら主をあがめる人が増やされるからです。だから、このように祈ることは当然なのです。

次に「**みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。**」というのも神をあがめている人のうちに自然にわきあがって来る思いです。天では神のみこころがなされています。問題はこの地上です。私たちは神のみこころに従うよりも自分勝手に生きようとしているからです。しかし、私たちは神のみこころに従うようにと、神によって造られ神によって救われたのです。ですから、神をあがめている人は、どうぞ神がますますあがめられますように、同時に、あなたのみこころが常になされますようにと祈るのです。これは心から神をあがめた人の内側に出てくる願いなのです。もっとこの神がたたえられるように、もっとこの神のご支配が広がるように、もっとこの神のみこころがなされて行くようにと、神を見上げた人がこのように神に求めて行くのです。私たちの祈りを考えたとき、このように神をたたえることよりも自分のことに時間を割いてしまいがちです。感謝を口にしたとしてもそれは形ばかりであり、いつの間にかそれが習慣となってしまっている、そのようなことがあります。心が伴っていないのです。祈りの目的は神をあがめることです。ロイド・ジョーンズという博士はこのようなことを言います。「私たちは祈りにおいてあまりにも自己中心的になりがちであり、そのため神の御前にひざまづいているときでさえ、ただ自分自身のこと、自分の問題や困難なことしか考えていない。そして、すぐにそれらのことを訴え始める。しかし、もちろん何事も起こらない。ここでの主イエスの教えによれば、

そういう祈り方によっては何事も期待するべきではないのである。これは神に近づく態度ではない」と。自分の望んでいることがかなえられることを願って祈る祈りというのは、神の前に正しくないというのです。このような祈りは私たちが救われる前に行なっていた祈りであり、悲しいことにそれが私たちの信仰の中にいつの間にか取り込んでしまっているのです。私たちは考えなければいけません。祈りはいったい何のためにするのか、その目的は何なのかです。

さて、そのことを知った上で私たちは今から、「祈りにおける正しい態度」をもう一度見て行きます。祈りの目的は分かりました。今度は私たちはどのような態度で主の前に立つべきなのかです。主をあがめるとき私たちにはどのような心の態度が必要なのかです。

## ●祈りにおける正しい態度

### 1. 神の前にへりくだって畏敬の念をもつこと

だれに対して、どこで祈っているのかを覚えることです。神の恵みの御座に立っていること、そして、私たちが語りかけている方は王の王であり、主の主であられるのです。

(1) モーセが羊飼いであったとき、神から大切なレッスンをいただきました。モーセは神を畏れることを学びました。モーセがあゝのホレブ山に来た時、芝が燃えているのを見、彼はもっと近付こうとしました。そのときにその芝の中から主がモーセに語られました。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」(出エジプト3:5)、神はモーセに大切なことを教えなければならなかった、モーセがこれから語ろうとしている神、この方は聖なる方であり、私たちは恐れをもってその方の前に立たなければならぬということです。主の前に私たちは履き物を脱いでへりくだることが大切なのです。どうでしょうか？皆さんの祈りの生活を見たときそのような畏れの思いをもって主の前に立っておられるのでしょうか？モーセがそのことを学んだだけではありません。

(2) 実は、天使たちもそのことを知っています。罪を犯したことの無い聖なる天使たちです。イザヤ6章にそのことが記されています。6:1-3「ウジャ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、:2 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、:3 互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ち。」、この罪のない天使は神の栄光を見ることができたのですが、それに値しない存在であると言っています。彼らが足をおおうというのは、罪を犯していなくても、このきよい神の前に私は立つことができないという、その現われなのです。罪のない天使でさえこのように主を恐れ敬っているのです。問題は私たちです。

(3) 十字架にかかった犯罪人のひとりも、大切なことを私たちに教えてくれます。十字架にかけられたときはそうではなかったのが真ん中にかかっているイエスを見るうちに、彼はもうひとりの犯罪人に対してこのようなことを言います。ルカ23:40-42「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」と、彼には天国が約束されました。彼はこの方がだれであるかが分かったのです。このイエス・キリストがまことの神であると分かったのです。そのときに彼はこの方に恐れをもったのです。私たちにも必要なことは、私たちが語るときに私の方を向いてくださっているお方、私の声を聞いてくださっているお方、私の心の叫びに耳を傾けてくださっているお方、私が口に出さなくても心の思いを見てくださっているお方、このお方は全知全能の神であり、きよい聖なるお方であることを覚えることです。私たちは潰されてしまうちりの中に住む小さな虫に過ぎないのですが、奇跡は、こんな者に対して神が目を留めてくださったことです。この万物は移り変わって行きます。しかし、この方は変わることがない、このようなお方を私たちは主と仰ぎその前に立とうとするのです。だから、私たちの祈りは形だけの儀式的なものではなく、真剣で真実な祈りをささげて行くことが必要なのです。主の前に立っていることを忘れてはならないのです。

### 2. 感謝と喜びをもって立つこと

私たちがこのように恵みの御座に立つことができるのは、私たちが何かしたからではなく、神が救ってくださったからです。そのことを私たちが覚えることです。どんなことを神は私のためになしてくださったのか、私のような罪人を赦し救いを与えてくださった、このことを感謝しながら主の前に立つことです。

### 3. 服従の決意をもって立つこと

さきほどの祈りを見たとき「みこころがなりますように」と言います。だから、祈りというのは神のみこころに従って行きますという決意でもあります。私の思い願いはこうです、でも、神さまあなたのみこころに従って行きますという祈りです。ですから、神のみこころに従って行くという決意がなければ、どのような祈りをささげようともそれは自己中心の祈りでしかないのです。

#### 4. 信頼をもって立つこと

不信仰な思いをもって立つてはならないのです。神はかなえてくださるのだろうか、聞いてくださるのだろうか、神にはできるのだろうか？と、そのような不信仰な思いで立つてはならないのです。神は必ずすべての必要を満たしてくださるし、それを最善のときに成してくださいます。そのことを信じて私たちは主の前に立つことです。

#### 5. 期待をもつこと

私たちは常に期待をもって立つことです。主の前に立つときに失望の思いをもって立つてはならないのです。たとえ絶望的な境遇にいたとしても神を見上げるとき、そこに希望をもつのです。私たちクリスチャンは難しい問題に遭遇しているときでも、神が働いてくださったならこの問題が神のみ栄えを現わす機会となることを期待するのです。神が約束されたことは必ずなると期待するのです。仕事がなくとも神は必要を満たすといわれたからどのように満たしてくださるのか期待しますと、病気で体が動かなくてもあなたが用いてくださるといわれるのだからそのことを期待しますと、死の床にあったとしても神が生かしてくださっているのなら神は用いてくださる、どうぞ用いてくださいと期待するのです。このように私たちは生きるのです。神が絶対者であり全能のお方であるから私たちは期待をもつのです。

このような態度をもって私たちは主の前に立つことです。私たちは一人一人主の前に喜ばれる祈りをささげて行くことが必要です。それは私が成長し、群れが成長し、信じていない人が救われ、すばらしいみわざを見るときとなるのです。中国で伝道したあのハドソン・テラーはこのように言っています。

「メッセージが必ずしも上手でなかった一人の若者が、神の召しを受けて外国の宣教地に赴きました。彼はある日、友人のところに出向いてこんな相談をしたのです。この国でいったいどのように用いられるだろうか？私には何の才能もないと。その友人はこのように答えました。兄弟、神がこの国で必要としておられるのは祈る人だよ、説教者ならたくさんいるけれど、祈る人は少ないと。そこで若者はそれを聞いて帰り、そのときから彼の部屋では、夜明け前から泣きながらその国のたましいのためにとりなす祈りの声が聞こえ続けたといえます。一日中閉ざされたドアの向こうではゆったりとした歩みにも似た静けさがみなぎり、ひとつのたましいが神と格闘し続けた。やがてこの家に飢え渴いたたましいが、抗しがたい見えざる力に引き寄せられるようにして集まり始めた。神の神秘的なみわざが解き放たれたのだ。人に知られざる密室で、失われたたましいがとりなされ獲得されたのである。失われたたましいのいる場所を知っておられる聖霊が、彼らをそこから導き寄せられたのである。」。

今この時代にあっても必要なのは同じです。祈る人です。主のみこころに沿って祈る人たちです。今私たちの群れに必要なのはそれです。このみことばを見ているときに、自分の祈りの生活がチャレンジされただけではありません。神が喜ばれる祈りの人として祈って行こうという新たな決心をしました。あなたはいかがですか？あなたに大きな働きが残されています。どんな働きをしたとしても、私たちが優先すべき働きはここにあるのです。主の前にひざまづくことです。この群れが一つとなるように、この群れがみ栄を現わして行けるように、神の栄光が現わされる群れとして成長して行くのに必要なのは、プログラムではない、組織でもない、皆さん、一人一人の祈りです。そういう人になりましょう！それが神が望んでおられることです。神があがめられること、それが私たちの一番望んでいることであるはずで、祈りの人としてこの1週間歩んでください。あなたの願いをささげる前に、主をあがめ続けてください。主が喜んでくださる、それが私たちの望むことです。